名古屋大学新聞　33.1.15.　第101号　(4)

18 ザ4

ザイルは切れた！

『氷壁』のモデルの実兄は語る

訂正

本紙前号掲載「ザイルは切れた」の記事中、医師助教授となっているのは誤りで、正確には医学部教授の誤りですので、訂正するとともに、筆者に謝罪しておわびします。

真実は鋼鉄である。鋼鉄を曲げれば折れる。真実も曲げれば折れて虚偽となる。

地平線子

死人に口なし

昭和三十年二月一日、前穂高四峰の滝上部下の岩稜において発生した、当時日本大学生物研究部（現在は山岳部）の学生パーティ三名の遭難死事件は、その後、遺族の方々の努力にもかかわらず、ついに真相は明らかにされないままに終ってしまった。

この事件は、当時、登山家の間で大きな話題となり、また、その後も、ことあるごとに、この事件の真相について、いろいろな憶測が行なわれてきた。

ナイロンロープが原因だ、ピッケルが悪かった、ギザギザの登攀のしかたが悪い、などなど。

しかし、この事件が起こってから、すでに二十年の歳月が流れ、当時の関係者の多くは、すでに故人となってしまい、また、生き残った人たちも、この事件については、ほとんど語ろうとしないし、語ることを避けてきたようである。

切ったか　切れたか

ところが、最近、この事件について、ふたたび、いろいろな憶測が行なわれるようになってきた。

それは、ナイロンザイルが切れたか切れないかということである。

ナイロンザイルは、切れないものだ、という神話のようなものが、一般の人たちの間にも、また、登山家の間にも、ひろまっていたからである。

ナイロンザイルが切れたとすれば、ナイロンザイルの欠陥ということになるし、ナイロンザイルが切れなければ、ナイロンザイルの欠陥ということにはならないし、ナイロンザイルの欠陥ということになれば、ナイロンザイルを使っていた人たちは、ナイロンザイルを使ったことについて、責任を問われることになるし、ナイロンザイルを製造販売している会社は、その責任を問われることになるし、ナイロンザイルを推奨していた人たちは